

# 雨 竜 沼 湿 原



徳 治 兼 国

でも林道開設以来多くの人が、暑寒別岳登山の途中で、あるいは直接この沼を見るために訪れており、また、各方面からの調査が行われたものと思われる。

二、概 要 雨竜沼は南暑寒別岳の東に恵岳玄武岩類がつくった熔岩台地上にあつて東西約2km、南北約1kmの瓢箪型の湿原であり、海拔八五〇mの高さのところにある。また、尾白利加川の支流ベンケペタン川はこの沼を源流としている。一般に雨竜沼と呼称しているが、一つの沼ではなく大小百数十個の池塘からなり、さらに面白いことには、池塘の水位が沼ごとに異なる様子がみられる。これはあきらかにミズゴケを主体とした泥炭層上に形成された池塘であるため、地下水の連絡がなく、融雪水か天水によるものであろう。したがって、正しくは雨竜沼高層湿原と呼んでいる。池塘の深さはさまざまであるが〇、七mから一mくらいのもが多く、水の色は薄いコーヒー色で池底には泥炭のくずれた堆積物が見える。中に浮島のある池塘があり風の方角により、あちこちの岸に寄せられている。水温は七月中旬では一六〜一八℃で八月に入ると二〇℃を越す沼が多く、pHは五、六〜二、六くらいの腐植栄養型に属する池塘である。

湿原のまわりは小高く、ダケカンバが点

在するチシマザサの群落であり、湿原内には樹木はなく六月末頃から湿原植物が咲きはじめ、七月中旬から下旬にかけて最盛期を迎える。まず、ミズバショウ、ショウジョウバカマ、ヒメシヤクナゲに始まり、エゾゼンテイカ、ハクサンチドリ、イワイチヨウなどが続き、最盛期にはキョウガノコ、ヒオウギアヤメ、シナノキンバイ、ナガボノシロワレモコウ、エゾシオガマ、サワギキョウなどが咲きみだれる。又、池塘の中にはエゾノヒツジグサやネムロコウホネがさき、沼の遷移をおわせるミツガシワが一面に咲く池塘もある。さらに池塘の隅には、ミズゴケにまじってモウセンゴケやツルクケモモが群落をなしている湿原植物の宝庫である。

三、保護について 雨竜沼は昭和三十七年四月十日付北海道告示第五二三号により、道内八番目の道立自然公園の指定をうけ、さらに昭和三十九年十月三日付で道指定天然記念物となり、昭和四十年九月四日北海道告示一七二七号により鳥獣保護区として六三九、九三ha、そのうち一〇一四七haが特別保護区に指定、昭和四十年十月一日から昭和六十年九月三十日までその保存に行政面からの手がさしのべられた。また、昭和四十五年から湿原内に木道が敷設され暑寒別岳への登山者の通路を指定するとともに

に便宜をはかっている。近年になってからこの沼の直接管理に当たっている雨竜町では花の最盛期頃に監視員をおくようになり、花の盗掘、通路外への踏入れを監視している。

しかし、すでに多くの見学者や登山家がおとずれ自然に踏みかためた通路が固定化したところには、湿原植生の変化がおこり代償植生が現われて来ている。これらを再び原植生に戻すことは不可能であり、せめて残された部分への波及を防ぎたいものである。

四、あとがき 雨竜町が観光資源として雨竜沼の宣伝に力を入れはじめ南暑寒別岳まで車が入るようになってから、サンダルまがいの軽装で沼へ訪れる人も現われた。雨竜沼が多くの人の眼にふれることは喜ばしいことではあるが、かつて現在の暑寒ダムから歩いて山荘にとまり、やっと眼にした雨竜沼の感激にはほど遠いのではないだろうか。

雨竜沼に限らず、われわれをとりまく自然環境が人と対立したのではなく、人間も自然の一部であるという考え方を日常生活の中から醸成したいものである。

(札幌北陵高等学校)

一、まえがき 雨竜沼がいつ頃から知られるようになったかさだかではないが、林務署の記録によれば昭和二十九年八月に林道が開設され、登山口より七九〇〇mさらに昭和三十一年には沼の中央を経由して暑寒別岳へ一七四〇〇mの林道が敷設されたところから、人々が訪れはじめたのはこの頃であろう。しかし、昭和十三年恵岳地質調査の記録が北海道大学修論中にあるというから、その頃からすでにこの沼の存在が知られていたのかも知れない。いずれにし